2019 年度全英連・英検共催　小中高校教員向け国内研修報告

那覇市立松島中学校
教諭：宮里　征吾

１．はじめに

本報告書では、2019 年度の全英連・英検共催「小中校教員向け国内研修」の申込から本研修までの一連の流れを示すと共に、参加者としての学びや振り返りをまとめることを目的とします。今後参加される先生方に少しでも参考になれば幸いです。

「国内研修」は、全国各地から小中高校の教員が集い、英語教員としての資質向上のために、指導に関する知識と実践力を高めることを目標として開催されています。今年度は、小学校教員 12 名、中学校教員 12 名、高校教員 12 名の募集がありました。7 月 25 日～27 日（2 泊 3 日）の本研修だけでなく、事前課題として、指導評価案の作成に取り組んだことが指導力の向上につながったと感じています。

会場は東京都新宿区にある英検協会内の会議室で、関東圏以外の研修生は、近くのホテルに滞在しました。交通費や宿泊費もすべて支給されるので、沖縄在住の教員にとって大変ありがたい機会です。以下の内容を読み進めてご興味を持たれたら、ぜひ応募してください！

２．事前準備

(1)応募に際して

参加申込書には、個人情報以外に、所属する研究会、コミュニケーション活動に関する実践例、最近読んだ英語教育関連の文献を記入する欄がありました。日ごろから実践していることをまとめるだけではありますが、合否を分けるかもしれないので、悩みながら書いたことを覚えています。また、締め切りが 6 月中旬なので、計画的に進める必要があります。私の場合は、中体連の地区大会で慌ただしい日々を送っていたら、締め切り間近になり慌ててしまいました。

(2)事前の課題について

事務局から事前課題が送られてきたときに、課題の内容に驚きました。私の個人的な感想ですが、かなり“ヘビー”な内容だと感じました。対外的な研究授業の準備をするレベルだと思います。以下に課題内容の抜粋を示したいと思います。

> 文部科学省作成の「中学校外国語：移行期間における指導資料（小中接続・帯活動）」＊を十分に理解した上で、この資料の「小中接続」１２時間の授業を終えた第１学年の生徒に対し、中学校教科書 の特定の単元をどのように導入し、４技能（５領域）を統合した活動まで展開させるかを検討する。
>
> この場合、１時間の授業計画では収まらないため、授業時間（数）にはこだわらず、小学校での学習事項を生かして ①「どのような導入（単元テーマ、新出語句・表現）を行うか」およびそこから ② 「単元の学習到達目標へと導くためにどのような言語活動の工夫を行うか」が読み取れるような「指導と評価案」としてまとめること。
>
> ＊「中学校外国語：移行期間における指導資料（小中接続・帯活動）」文部科学省 HP
> http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1414459.htm

私が“ヘビー”だと感じた理由がいくつかあります。まずは、未読の資料を熟読する必要があるということです。恥ずかしながら、私は「中学校外国語：移行期間における指導資料（小中接続・帯活動）」については、事前課題で初めてその存在を知りました。（15 頁程度のスライドが PDF ファイルでダウンロードできます。）内容はすべての中学校英語教員が把握すべきことがシンプルにわかりやすくまとめられていますので、未読の方はぜひご参照ください。２つ目の理由は、4 技能（5 領域）を統合した活動例を含む単元計画を示す必要があることです。聞いたり、読んだりしたことについて、話す・書くという活動は普段から意識していたのですが、どちらかというと聞くこと・読みことを中心に授業を進めて、単元のまとめで話す・書く活動に取り組むことが多いので、いかにしてスモールアプトプット活動を取り入れるか悩みました。3 つ目の理由が、指導案だけでなく評価案も示す必要があることです。特に対象を 1 学年と指定されていたので、ルーブリック（評価規準表）を作成するのが難しいという印象がありました。

また、事前課題に取り組む留意事項として、以下の点が挙げられていました。

【留意事項】

(1) 以下いずれかの教科書（第 1 学年用）を扱うこと。参加者各自が作成する「授業と評価案」で扱う単元の指定は行いません。 N EW HORIZON English Course 1 （東京書籍） NEW CROWN English Course 1 （三省堂）

(2) 各自取り上げる単元の「学習到達目標」を各自設定すること。 「授業と評価案」に含める言語活動はその「学習到達目標」に向けたメイン活動とする。

(3) 「小学校学習指導要領解説」 「中学校学習指導要領解説」にある各領域の言語活動例を参照し、 小学校「外国語活動」「外国語」の言語活動を踏まえた中学校の「言語活動」を目指すこと。

(4) 小学校「外国語活動」「外国語」の教材（Let’s Try! 1, 2 / Hi, friends! 1, 2 / We Can! 1, 2）の教科書、ワークシート、デジタル教材を活用してもよい。

まず、私の所属する地区では上記の教科書が採択されていないため、国頭地区の友人から教師用教科書と指導書を借用して指導評価案の作成に取り組みました。また、単元を計画する上で、小学校・中学校の学習指導要領解説を読み直し、小学校外国語活動・外国語科の教材をじっくりと研究することは、中学校の授業の組み立てに大いに役に立ちました。

私の認識としては、小学校の段階では、五感をフルに活用しながら内容を理解し、体験的な活動を通して、学びを定着していくというイメージです。中学校では、小学校で体験的に学んだことを明示的に理解したり、さらに活用することで定着を深めていくことが大切だと思います。小学校でどのような言語材料が扱われ、どのように子どもたちは学んできたかを理解することが、中学校での言語活動の充実につながると感じました。

評価に関しては、単元の最後にパフォーマンス評価を実施することにしました。勤務校の先生方に助言をいただきながら、ルーブリックを作成しました。1 学年は語彙も文法事項も限られているため、パフォーマンス評価の難しさを感じました。

以上に述べてきたように、事前課題にはじっくりと取り組む必要があります。課題に取り組む中で、小学校外国語科についての理解が深まり、学習指導要領等の資料を読みながら、これまえの自分自身の実践を振り返ることができ、非常に有意義な学びとなりました。

３．研修内容について

本研修（7 月 25 日～27 日）の研修内容は、初日に基調講演と担当講師からの講義、二日目に小中高校に分かれて＊マイクロ・ティーチングに向けての取り組み、最終日に各グループによる実践発表及び講評となっていました。（参考資料①）ここでは、マイクロ・ティーチングの取り組みについて焦点を合わせて報告したいと思います。

＊マイクロ・ティーチング：指導法を学ぶための実践訓練。5~15 分程度の模擬授業を行い、ビデオによる授業分析や担当講師からの助言をもらうことで、指導力向上を図る方法。

(1)マイクロ・ティーチングに向けての取り組み

最初に各校種に分かれて、それぞれが作成した指導評価案についての説明を行いました。時間が限られていたため、私は単元の目標と計画、パフォーマンス評価とルーブリックの内容を中心に説明しました。その後、最終日にマイクロ・ティーチングをするグループの編成を行いました。グループは、事前課題で指導案を作成した単元をもとに 4 人のメンバーで構成されました。

グループでは、いわゆる“Backward Design”の視点を意識し、単元を計画しました。その際に求められたのが、小学校外国語活動・外国語科との連携を意識することです。小学校の教材である Let’s Try! 1, 2 / Hi, friends! 1, 2 / We Can! 1, 2 をもとに、小学校で使われている言語材料、言語活動を発展させる形で活動を考えました。小学校では 3 ヒントクイズ（Guess Who?）がよく取り入れられるので、マイクロ・ティーチングでのメインの活動は Picture Description を採用しました。ペアになって、一人は絵を見てその内容を英語で説明し、もう一人は絵を見ないで人物やもの・ことを当てるという活動です。徐々にヒントを出していくという点が共通しているため、中学 1 年生でも取り組みやすいかと考えました。

今回のプレゼンの時間は 15 分だったため、最初の 5 分を導入の方法、次の 5 分間は明示的なまとめの方法、最後の 5 分間は言語活動にしました。時間の都合上、口頭での説明を挟みながら、体験してもらう形を取りました。

(2)　マイクロ・ティーチングの発表

当初の予定では、小中校の代表グループが 45 分間の模擬授業をすることになっていましたが、全グループ 15 分程度の発表をすることになりました。普段は小学校や高校の授業を参観する機会はなかなかないので、大変参考になりました。どのグループも熱い想いが込められていたため、かなり時間がオーバーしてしまい、私は飛行機の時間の都合で高校学校の最後のグループは見られずに帰路へ着きました。。。（帰りのフライトの時間は余裕を持った方がいいかと思います。）

４．おわりに

国内研修は事前課題から本研修まで本当に充実した内容で、私にとって大変有意義な研修となりました。研修で出会った先生方には大いに刺激を受け、研修後の教材研究への意欲が湧いてきました。また、懇親会では互いの地域・勤務校の英語教育について情報交換することができました。今後もこのネットワークを活用して、互いに刺激を受け合いながら指導力の向上に努めていきたいと思います。